

メタ言語的機能と詩的機能 ——ヤコブソンの《手段＝目的モデル》における自己言及性について—— 大平 陽一

はじめに

フランスの作家、ローラン・ビネ(Laurent Binet, 1972-)に『言語の七番目の機能』(La Septième Fonction du langage, 2015)という小説がある。アンテラリエ賞など複数の賞を受けた記号論的ミステリーなのだという。日本語訳も上梓されており、版元の東京創元社のサイトの「内容紹介」には次のようにある。

大統領候補ミッテランとの会食直後、交通事故で死亡した哲学者、記号学者ロラン・バルト。彼の手許からはある文書が消えていた。これは単なる事故ではない！ 誰がバルトを殺したのか？ 捜査にあたるバイヤール警視と若き記号学者シモン。この二人以外の主要登場人物のほぼすべてが実在の人物たち。フーコー、デリダ、エーコ、クリステヴァ、ソレルス、アルチュセール、ドゥルーズ、ガタリ、ギバール、ミッテラン……という綺羅星のごとき人々。¹

題名にある「七番目の」という序数詞が含意しているのは、ロマン・ヤコブソン(Roman Jakobson, 1896-1982)の提起したいわゆる「6 機能モデル」であり、この書名は、ヤコブソンの《手段と目的モデル》がフランスではある程度知られていることをうかがわせる。

そのヤコブソンが創設メンバーの一人であったプラハ言語学サークルは、二人の先駆者のうちフェルディナン・ド・ソシュール(Ferdinand de Saussure, 1857-1913)から〈構造〉、ヤン・ボードゥアン・ド・クルトネ(Jan Niecislaw Baudouin de Courtenay, 1845-1929)から〈機能〉の概念を継承した、との指摘がしばしばなされてきた。実際、1929 年の第 1 回国際スラヴィスト会議に提出された「テーゼ」の第 1 条は、「言語とは機能的体系であるという考え」と題されており、そこでは「構造」の類義語と見なしている「体系」という名詞を「機能的」という語が修飾していた。² また『言語学大辞典・用語編』の「プラーク学派」の項目でも、同派における機能の概念の重要性が力説されている。

機能は構造とともにこの学派にとって二本柱となる概念であるが、言語に機能があるからこそ、それに対応する構造があるので、自ずと機能は構造に先行し、より重要である。したがって、こ

¹ 東京創元社のサイト[<https://www.tsogen.co.jp/np/isbn/9784488016760>] 2025 年 7 月 7 日閲覧。

² プラハ言語学サークル／山口巖訳「テーゼ」、山口巖『パロールの復権 ロシア・フォルマリズムからプラーク言語美学へ』ゆまに書房、1999 年、351 頁。なお、第 1 条はヤコブソンによって起草された。

の学派はしばしば、機能構造学派あるいは機能言語学派といわれる。³

しかし、「プラハ学派の使徒」とも称せられた言語学者のヨゼフ・ヴァヘク(Josef Vachek, 1909-1996)の指摘するところによれば、プラハ学派は「構造主義的観点と機能主義的観点を受け入れるということに関しては一枚岩だが、共通の原理の応用となると小さからぬ見解の相異が常に存在した」のだという。⁴ 実際、「機能言語学派」と呼ばれたプラハ学派の内部においてさえ、〈機能〉の定義は多様であったし、言語の機能についても、ドイツの心理学者カール・ビューラー(Karl Ludwig Bühler, 1879-1963)の《オルガノン・モデル》やヤコブソンと共にプラハ構造美学を代表する文学理論家ヤン・ムカジョフスキー(Jan Mukařovský, 1891-1975)の、実用的、理論的、象徴的、美的機能の4機能からなるモデルなど、これまでいくつも提起されてきたのだが、それら全ては、ヤコブソンの「言語学と詩学」(Linguistics and Poetics, 1960)で打ち出された《手段＝目的モデル Means-Ends Model》に取って替わられ、ほとんど顧みられなくなっている。しかも、ヤコブソンのいわゆる「6 機能モデル」は、言語についてのモデルであって、芸術テキストの機能モデルとして特化されているわけでもないのに、一部の文学理論家や美学者はこの事実を等閑視し、何にでも適用可能な万能の図式として援用してきた嫌いさえある。

ヤコブソンの《手段＝目的モデル》の六つの機能のうちでも、とりわけ多く論じられてきたのが〈詩的機能〉であった。文学理論家や美学者が《手段＝目的モデル》を援用したり、議論の俎上に載せたりしたのだから、当然だろう。だがヤコブソン自身とは言えば、〈メタ言語的機能〉についても、〈詩的機能〉と同じくらい力を込めて論じている。これら二つの機能は、前者が〈メッセージ〉それ自体への指向性・焦点合わせ、後者が〈コード〉への〈指向性・焦点合わせ〉という標識をもつことによって区別されており、音韻論的な比喻を用いるなら、両者の弁別素性は〈メッセージ／コード〉の二項対立ということになる。「言語学と詩学」においては、次のように定義されている。

The set (*Einstellung*) toward the MESSAGE as such, focus on the message for its own sake, is the poetic function of language.

〈メッセージ〉それ自体への指向、メッセージそれ自体のために焦点を合わせるのが、言語の詩的機能である。⁵

³ 亀井孝・河野六郎・千野栄一『言語学大辞典 第6巻:術語編』三省堂、1996年、1153頁。

⁴ Josef Vachek, *The Linguistic School of Prague*, Bloomington: Indiana University Press, 1966, p. 8. 本稿の日本語訳は、特に言及のない場合は著者による。

⁵ Roman Jakobson, *Linguistics and Poetics*, in Stephen Rudy, ed., *Selected Writings III: Poetry of Grammar and Grammar of Poetry*, The Hague: Mouton Publishers, 1981, p. 25.

Whenever the addresser and/or the addressee need to check out whether they use the same code, speech is focused on the CODE: it performs a metalingual (i.e. glossing) function.

送信者および／または受信者に、自分たちが同じコードを使っているかどうかを確かめる必要の生じた時はいつも、ことばは〈コード〉に焦点が合わされる。しかして、そのことばはメタ言語的(すなわち注解的)機能を果たすことになる。⁶

ヤコブソンの言語理論における〈コード code／メッセージ message〉の対概念は、往々にしてソーシャルの提起した〈ラング langue／パロール parole〉の言い換えのように理解されることがある。いま、ここでの場合は、そうした理解で問題はない。むしろ都合が良いくらいだ。しかし、ヤコブソンの晩年の共著者でもある言語学者、リンダ・ウォー(Linda R. Waugh, 1942-)の『ヤコブソンの言語科学』(Roman Jakobson's Science of Language, 1976)によれば、ヤコブソンにおけるコード／メッセージは、ソーシャルのラング／パロールとちがって、社会的／個人的という対立ではないのだという。メッセージにはさまざまな段階の社会化を被ったものがある一方、コードもまた一枚岩的ではなく、明瞭的な〈書記言語〉と比べて省略的な〈口頭言語〉のように、相対的に自律した下位コードが存在する、とヤコブソンは考えたというのである。⁷ ウォーのこの指摘が正しければ(そして、それはその通りだと思われるのだが)、シンメトリカルに整った《手段＝目的モデル》にひずみをもたらしかねないであろう。一旦、《手段＝目的モデル》の対称性、整合性に対して疑いの目を向けると、ヤコブソンが自説のなかでもっとも力を入れて論じた二つの機能、すなわち詩的機能とメタ言語的機能の区別は、截然となし得ないのではないかという疑念が生じる。小論においては、詩的機能とメタ言語的機能が実際には区別しがたい場合があることを、和歌や現代詩の実例でもって示し、その理由を探ってみようと思う。

ヤコブソンの詩学自体がほとんど顧みられなくなった今、半世紀以上も前に提起された《手段＝目的モデル》を再検討に付すことにさしたる意味はないのかもしれないが、それが一部で今なお定説のように扱われていることを鑑みるならば、⁶ 機能モデルに対する疑問点を論じることにもいくばくかの意味はあるだろう。

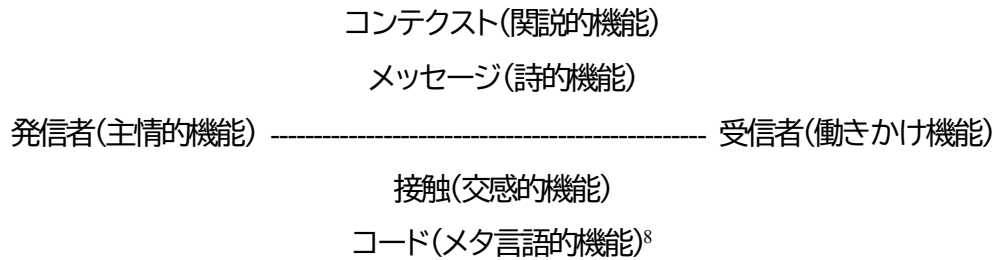
《手段＝目的モデル》

ここで、今さらではあるが、《手段＝目的モデル》について手短かに紹介しよう。ヤコブソンは当時流行し始めていた情報理論をいち早く援用し、まず言語コミュニケーションに関与する六つの要因を特定する。すなわち、話し手が〈発信者 addresser〉、聞き手が〈受信者 addressee〉、話題や場面が〈コ

⁶ Jakobson, *Linguistics and Poetics*, p. 25.

⁷ Linda R. Waugh, *Roman Jakobson's Science of Language*, Lisse: The Peter de Ridder Press, 1976, pp. 23-24.

ンテキスト context)、発話が「メッセージ」というふうには。それ以外に、メッセージの授受には、発信者と受信者の物理的・心理的「接触 contact」が必要であり、受信者と発信者が共有し、メッセージの作成(符号化)と理解(復号化)を可能にする当該言語の語彙と文法、すなわち「コード」の存在が不可欠であると説明し、それらの要因との関連によって、言ってみれば演繹的に六つの機能を定義した結果が、彼のシンメトリーへの偏愛をうかがわせる次のモデルであった。



まず、指示対象への焦点合わせ(a set towards the referent)、コンテキストへの指向(an orientation toward the context)を持つのが「関説的 referential」機能であるが、⁹ 対象指示的(denotative)機能であるとか認知的(cognitive)機能という方が分かりやすいかもしれない。言うまでもなく、言語本来の機能はあくまでも内容の伝達であり、当然ながら、ほとんどの言語メッセージではこの関説的機能が支配的(ドミナント)だとされる。

次に「あっ」とか「えっ」とか「ちえっ」といった間投詞(感動詞)が果たす「主情的 emotive」機能では、発信者に焦点が合わせられるし(focused on the addresser)、命令形に典型的な「働きかけ conative」機能は、受信者への指向(orientation toward the addressee)を有する。

これら三つの機能は、それぞれ一人称の「私」、二人称の「あなた」、そして話題になっている「何か」あるいは「誰か」という三人称で指されるものに対応するとしてビューラーの《オルガノン・モデル》を踏襲しており、¹⁰ ヤコブソンはそこにさらに三つの要因と、各要因と相関する三つの機能を補完したことになる。

補足された要因とそれに対応する機能の一つ目が、「接触」の有無を確認するための「もしもし聞こえてる」といったメッセージなどが果たしている「交感的 phatic」機能である。¹¹ 「交感的」という用語は、単にことばを交わすという行為によって連帯感が生まれる場合について人類学者のプロニスワフ・マリノフスキー(Bronisław Malinowski, 1884-1942)が用いた“phatic”という語に由来する。

⁸ Jakobson, *Linguistics and Poetics*, pp. 22, 27. この図は左記の二箇所の図を合成したものである。

⁹ Jakobson, *Linguistics and Poetics*, p. 22.

¹⁰ *Wikipedia, the Free Encyclopedia* [https://en.wikipedia.org/wiki/Organon_model] 2025年7月7日閲覧。

¹¹ Jakobson, *Linguistics and Poetics*, p. 24.

次に「曾祖父とは祖父母の父のことだ」というメッセージのように、コードを記述・分析するために通常の自然言語が用いられる場合が——すなわち〈コード〉を指向し、焦点が合わせられているのが——〈メタ言語的 metalingual〉機能とされた。¹²

そして最後に〈詩的機能〉が「メッセージそれ自体への指向」、「メッセージそれ自体のために焦点を合わせること」と定義される。¹³ 少々分かりにくいこの語句は、言語によって表されている内容ではなく、それがどんな言葉遣いで表現されているかに対する関心、自己目的として、自己充足的な行為としてメッセージに注意を集中すること、と言い換えられるだろう。この定義はフォルマリズム時代の著書『最新ロシア詩』(Новейшая русская поэзия, 1921)にまで——「私が詩にとって本質的な唯一の因子として指定するのは、表現に対する指向性だ」という一節にまで遡る。¹⁴ ただ 1921 年の『最新ロシア詩』では「詩とは美的機能の中にある言語である」という一節にもうかがえるように、¹⁵ そこで定義しようとした〈詩的言語〉なるものが、〈コード／ラング〉的な体系なのか〈メッセージ／パロール〉的なものなのか判然としない対象であったが、1960 年の論文「言語学と詩学」において定義されるのは〈詩的機能〉であり、結果的に詩的メッセージと詩的機能の関係がすっきりしたものになっている。しかも、「詩的機能を詩の世界にだけ局限しようとしたり、もしくは詩を詩的機能だけに限定しようとしたりする試みは全て、誤った過度の単純化に堕することになろう。詩的機能は言語芸術の唯一の機能ではなく、ただその支配的、決定的な機能」というふうに、¹⁶ 後期フォルマリズムの概念〈ドミナント dominant〉が言語の多機能性と組み合わされている点は見逃せない。

とはいえ、すでに述べた通り、「指示対象に対する指向性、コンテキストへの指向性が——手短に言えば関說的機能、外延的、知的機能が——多くのメッセージの主たる任務」であることは、ヤコブソン自身が認めていた。¹⁷ 言語においては、もっぱら関說的機能のための手段が整備、構造化されているかのように見えるのは、まぎれもない事実である。

そうしたコンテキストを指向する関說的機能に対して、もっぱら主情的機能を果たす間投詞が——「あっ、しまった」「ああ、めんどくさい」「えっ、ほんと」「ちえっ、ついてないや」「まあ、素敵」の下線部や、¹⁸ “Wow!”(驚き)、“Oops”(狼狽)、“Gaa”(驚き・苦痛)のように——日本語や英語の〈コード〉には存在している。日本語の間投詞には音形の特異性が目につくが、英語の間投詞の場合も同

¹² Jakobson, *Linguistics and Poetics*, p. 25.

¹³ Jakobson, *Linguistics and Poetics*, p. 25.

¹⁴ Якобсон Р. О. Новейшая русская поэзия. Набросок первый. Виктор Хлебников. Прага: Типография «Политика», 1921. С. 41.

¹⁵ Якобсон. Новейшая русская поэзия. С. 11.

¹⁶ Jakobson, *Linguistics and Poetics*, p. 25.

¹⁷ Roman Jakobson, *Metalanguage as a Linguistic Problem*, in Stephen Rudy, ed., *Selected Writings VII: Contributions to Comparative Mythology. Studies in Linguistics and Philology, 1972 – 1982*, Berlin / New York / Amsterdam: Mouton Publishers, 1985, p. 114.

¹⁸ 日本語文法では「感動詞」という用語が一般的なようである。

様で、“Ugh”(嫌悪・恐怖)の軟口蓋摩擦音[x]や“Tut-tut”(舌打ち)の吸着音のように英語の音素目録には含まれていない音が現れるし、“Hmm”(疑問、当惑)は、英語では例外的に子音のみから成り立っている。“Psst”「ちょっと」や“Shh”「しっ(静かに)」も子音だけしかない語であり、しかもこれらの間投詞の場合、その機能は主情的機能ではなく、前者においては交感的機能であり(日本語の感動詞「ちょっと」や「ねえ」「もしもし」も同様)、後者は働きかけ機能を果たしている。

この働きかけ機能のもっとも純粋なあらわれである〈命令 imperative〉だけが、印欧諸語の動詞と日本語の動詞のまったく異なる活用のなかで、唯一共通しているという事実は——人称・数・態・時称・アスペクト・法の文法範疇に則してさまざまな変化形をとる印欧諸語の動詞の活用とはちがって、文の中における位置関係を示すに過ぎなかったり(終止・連体・連用形)、一定の助動詞や助詞と結びついて用言複合体を形成する語基を示したりするだけで(未然形と已然形)、それ自身で明確な文法的機能をもっていない日本語動詞の変化形のなかで、唯一命令形だけは、それ自体が働きかけ機能をもっている事実は——「命令文はもっとも基本的な言語形式である」というヤコブソンの主張を裏書きしているように思われるし、「まさにこの理由によって、幼児の言語においていちばん初期の層に現れる命令文は、失文法症の場合もっとも抵抗力が強い」のであろう。¹⁹

また脳の右半球に損傷があった場合に、患者は言語的実体を結合してコンテキストを作り出すことに困難を覚え(統合性障害)、機能語がまっ先に失われ、名詞に比べ動詞が強い影響を受けるが、“Stop!”や“Help!”のような命令形の単純な形は、例外的に残るのだという。²⁰ 英語の命令文には活用語尾がないし、主語もない。ロシア語やチェコ語などの屈折タイプの言語において「命令形がしばしば不変化の語幹に封じ込められているという傾向」も²¹——たとえばロシア語の命令形の«читай»「読め」や«верь»「信じろ」でも、現在語幹がむき出しになっているだけで、活用語尾がないという特異性も——命令形の、ひいては働きかけ機能の原初的性質を示しているようではある。

働きかけ機能や主情的機能、交感的機能が、言語的メッセージで作用する事例は、全体の比率からすればごく僅かでしかないのに、コードにその反映を見出せることは、これら三つの周辺的な機能を指定することの妥当性を立証しているように思える半面、感動詞によって三つ全ての機能が表現されうるという事実は、用例から帰納的に機能を分類するのではなく、言語コミュニケーションに関与する六つの要因との相関関係によって演繹的に周辺的な機能を三分することに対して——少なくとも人称と結びついていない交感的機能を、独立した機能として取り立てることに——疑念

¹⁹ Roman Jakobson, On Aphasic Disorders from a Linguistic Angle, in Stephen Rudy, ed., *Selected writings VII: Contributions to Comparative Mythology: Studies in Linguistics and Philology, 1972—1982*, Berlin / New York / Amsterdam: Mouton Publishers, 1985, p. 136.

²⁰ Roman Jakobson, *Brain and Language: Cerebral Hemispheres and Linguistic Structure in Mutual Light*, New York University Slavic Papers 4, Columbus, Ohio: Slavica Publishers, 1980, p. 29.

²¹ Jakobson, On Aphasic Disorders from a Linguistic Angle, p. 136.

を抱かせる。人称との相関という点からしても、交感的機能は、働きかけ機能と同様、二人称への働きかけを前提としているのではないかという疑いを禁じ得ない。

ましてや、メタ言語機能と詩的機能となると、感動詞や命令法のようなコードに属する手段がそもそも存在しない。詩的機能と深くかかわる〈平行法 parallelism〉や〈文法的な綾 grammatical figures〉がどれほど広範囲に数多く観察されようとも、関説的機能のために整備されたコードが詩的に造形されるべき素材を提供しているのであり、メッセージのレベルに属する手法でしかない。

補完された三つの機能のうち、ヤコブソンがとりわけ重要視したのは、実は、こうした固有の言語的手段を持たないメタ言語的機能と詩的機能であった。彼の言語研究が詩学に始まったことを思えば、詩的機能への強い関心は当然であり、既述の通り、詩的機能の定義のルーツも『最新ロシア詩』に見出すことができる。その一方で、初めて整った形で《手段＝目的モデル》が提起された 1956 年の口頭発表が「言語学の問題としてのメタ言語」(Metalanguage as a Linguistic Problem, 1976)と題されていたあたりにも、ヤコブソンの言語論にとってのメタ言語の重要性が見てとれる。

詩的／メタ言語的機能、メッセージ／コード、関説／指向

論文「言語学と詩学」におけるメタ言語的機能の定義には、「ことばは〈コード〉に焦点が合わされ、メタ言語的な(つまり注解的な)機能を果たす」とあり、²² メタ言語的機能と注解的機能が同一視されていた。ヤコブソンにとっては、メタ言語的機能の重要性は、イコール注解的機能の重要性なのであり、「曾祖父とは祖父母の父のことだ」のような等式的命題をメタ言語の典型とした。同じメタ言語的なメッセージでも、音韻論上の単位が問題となっていて意味とは直接関係しない「朝」は第一音節が高い」というような例については、深く立ち入って論じていない。もっぱら、前者のような等式的命題こそが、「語義および文法的意味の記述・分析にひとつの基礎を与える」ものであり、²³ 意味論の構築には、まずメタ言語から着手しなければならない——意味について議論するには、言い換えに基づく注解的なメタ言語的操作を出発点にするほかない——と、ヤコブソンは考えていた。

さらには、こうした等式が、幼児の言語習得において果たす本質的重要性についても力説した。

Any elucidating interpretation of words and sentences – whether intralingual (circumlocutions, synonyms) or interlingual (translation) – is a message referring to the code. Such a hypostasis [.....] plays a vital role in the acquisition and use of language.

単語や文の明快な解釈は——それが言語内(迂言法、類義語)であれ、言語間(翻訳)であれ

²² Jakobson, *Linguistics and Poetics*, p. 25.

²³ Jakobson, *Metalanguage as a Linguistic Problem*, p. 221.

——コードに閑説するメッセージである。このような閑説対象化は[……]言語の習得と使用において重要な役割を果たす。²⁴

児童のメタ言語的操作について山中桂一(1940-)は、「覚えてばかりのことばや自分のことばを客体化し、語や文の組みたてと選択、音声の並び方などについて、まるで目で見、手で触れているかのように語る」と、²⁵ 比喩的に語っているが、「目で見、手で触れて」といった言い回しが、ヤコブソンの「この機能は、記号の手ざわりを強めることによって記号と対象との基本的な亀裂を深める」という表現を思い起こさせる。²⁶ もっとも、ヤコブソンの説明は、メタ言語的機能ではなく、詩的機能に関するものなのだが、メタ言語的機能と詩的機能の説明の中にこうした類似が見出されることは、決して偶然ではない。《手段＝目的モデル》からすれば〈コード〉と〈メッセージ〉は峻別されねばならないのだから、粗笨な物言いになるのだろうが、メタ言語的機能と詩的機能には広い意味での「ことば」に対する〈言及・閑説 reference〉ないし〈指向 Einstellung〉が、すなわち再帰的自己言及性が共通しているのではないだろうか？

実際のところ、メタ言語的操作が前景化しているメッセージが、言語遊戯と同様、詩的機能を果たしていると感じられる例は少なくない。こうした事例においては、むしろメタ言語的機能と詩的機能を区別することの方が難しい。以下にメタ言語的な詩句を——漢字の構成に着目した字義解釈的な詩の断章をいくつか引用してみよう。²⁷ まずは『古今和歌集』の249番、文屋康秀(生没年不詳)の作とされている歌である。

吹くからに秋の草木のしほるれば むべ山風をあらしといふらむ

この歌の面白みは、「嵐」と「荒し」とを懸け、「山」と「風」を組み合わせれば「嵐」という字になると洒落る言語遊戯的側面にある。文字遊戯に関しては、「秋の木」がヒサギ(楸)を隠す可能性まであるのだという。同様の趣向は、『古今和歌集』337番の「梅」を「木毎」ととりなす紀友則(生没年不詳)の歌「雪降れば木ごとに花ぞ咲きにける いづれを梅とわきておらまし」にも知られているが、これは漢詩の〈離合詩〉の日本における亜流、〈字訓詩〉の流れをくむものだという。

文屋康秀のように漢字のモンタージュ性に着目した連作が、現代詩人の吉野弘(1926-2014)にも

²⁴ Roman Jakobson, Shifters, Verbal Categories, and the Russian Verb, in *Selected writings II: Word and Language*, The Hague / Paris: Mouton, 1971, p. 131.

²⁵ 山中桂一『ヤコブソンの言語科学 1 詩とことば』勁草書房、1989年、152頁。

²⁶ Jakobson, *Linguistics and Poetics*, p. 25.

²⁷ 小論では、もっぱら文字のメタ言語的記述を取り上げるが、たとえば同音異義性を利用して一つの語を二つの意味に働かせる、和歌の手法の掛詞や、ヤコブソン自身が『最新ロシア詩』で取り上げている「「彼ははだかで裸体だ」、「知れよ心得よ」」のような類義語遊びも、メタ言語的な意識をともなう詩的手法と言えよう。

知られている。詩集『北入曾』(1977 年)所収の「争う」と「漢字嬉遊曲」から、その一部分を引く。

青空を仰いでごらん。
青が争っている。
あのひしめきが
静かさというもの。²⁸

母は
舟の一族だろうか。
こころもち傾いているのは
どんな荷物を
積みすぎているせいか。²⁹

「母」という文字から、三好達治(1900-1964)の『測量船』(1930 年)所収の詩「郷愁」の一節を連想する人も少なくないだろう。

「海、遠い海よ！ と私は紙にしたためる。——海よ、僕らの使ふ文字では、お前の中に母がゐる。そして母よ、仏蘭西人の言葉では、あなたの中に海がある。」³⁰

この有名な詩では、漢字の「海」には「母」の字が含まれている一方、フランス語では母が「*mer*」、海が「*mère*」であることに焦点が合わされている。

アメリカの詩人、エズラ・パウンド(Ezra Pound, 1885-1972)も、漢字に対して並々ならぬ関心を持っており、それが創作と密接に結びついていたことはよく知られている。実際、康秀の歌や吉野の詩に似た例を、彼の長編詩『キャントーズ』(1917-1948)に見出すことができる。ここでは第 76 編と第 457 編の一部分を引用しよう。

and in government not to lie down on it
the word is made

²⁸ 吉野弘『吉野弘詩集』岩波文庫、2020 年、Kindle の位置 No. 760-761.

²⁹ 吉野弘『吉野弘詩集』、Kindle の位置 No. 745-746.

³⁰ 三好達治『測量船』講談社文芸文庫、1996 年、85 頁。

perfect 誠

政においては決して倦んではならない

言葉が

全く成ること 誠³¹

(Canto, LXXVI)

To study with the white wings of time passing

is not that our delight

過ぎ行く「時」の白い羽とともに学ぶのは

よろこばしいことではないか³²

(Canto LXXIV)

前者では “the word is made perfect” 「言葉が全く成る」という英語の文が、そのすぐ後ろに印刷されている「誠」という漢字の構成と意味を暗示している。一方、後者では、“white wings” という詩句によって(「白」+「羽」)、テキストには現れていない「習」という漢字が暗示されている。

チェコ・アヴァンギャルドを代表する詩人ヴィーチェスラフ・ネズヴァル(Vítězslav Nezval, 1900-1958)の連作詩『アルファベット』(Abeceda, 1924)では、ラテン文字が靈感源になっている。「B」では、女性のバストとの形状の類似が、オレンジやバストのイメージを呼び起こす一方で、「二番目の文字」といったメタ言語的説明もここにはある。

oranžový plod lampion mléčné záře

jímž matka poprvé opojí v kolébce syna

druhé písmenko dětského slabikáře

a obrázek milencina prsu

片方はオレンジ 片方は乳色に明滅するランタン

母の胸から流れ出る陶酔をもたらすせせらぎ

小学読本の二番目の文字にして

恋人の胸の絵³³

³¹ Ezra Pound, *The Cantos of Ezra Pound*, New York: New Directions Publisher, 1996, p. 474; エズラ・パウンド／新倉俊一訳『エズラ・パウンド詩集』角川書店、1976年、266頁。

³² Pound, *The Cantos of Ezra Pound*, p. 457; パウンド／新倉俊一訳『エズラ・パウンド詩集』、254頁。

³³ Vítězslav Nezval, *Abeceda*, Praha: J. Otto, 1926, s. 8.

詩ではなく小説だが、現代日本の作家、多和田葉子(1960-)にも、漢字やラテン文字を客体化した記述がいくつも見出される。

おいらはアルファベットをゆっくり眺めるのが好きだ。R はお腹がぷっくり膨れていて、片足を斜め前に出している自信家だ。i はなんだか子どもみたいだな。小さな頭が首から離れて宙に浮いているのが心配だけれど。食べすぎて太ってきた g。お腹が痛くて体を丸めている e。病気じゃないといいな。t はお墓の十字架だ。³⁴

てんちゃんは**全然**エキセントリックなところのない女性だと思っていたら、**全然の然**に火がついて**燃え**だし、舌が**炎**になった。³⁵

短編小説「韋駄天どこまでも」(2014 年)においては、メタ言語的、言語遊戯的なメッセージの中で、漢字がエロティックなイメージを獲得している。

一子とてんちゃんは顔と顔をやさしくすりつけ合い、片腕を胴に絡ませ、もう一方の手でお互いの身体を熱心に探り合った。二人ともこれまで他人の身体のそんな奥まで手をさし入れたことがなかった。たとえば「東」という字がそこにあれば、字の中まではいじらないのが漢字に対する礼儀というものである。ところが、てんちゃんは東田の「東」の字の口の中にまで手を突っ込んで、そこにある美味しそうな横棒をつかんで外へ引き出そうとする。「駄目よ、駄目よ」と一子はあえいだ。奪われたものを取りかえすために今度は一子が「てんちゃん」という可愛らしい渾名の裏に隠れた卑怯な十子の足の交わったところに手を差し入れて、「十」の縦棒をつかんで揺らしながら引きよせた。てんちゃんは「う」と言って身をそりかえした。二人は、奪い、奪い合い、字体を変え、画数を変えながら、漢字だけが与えてくれる変な快楽を味わい尽くした。³⁶

最初に挙げた、純粋な言語遊戯に近い文屋康秀の歌以外では、メタ言語的機能が詩的機能を支配するドミナントな要因であるとは断定しにくい。だが少なくとも、コードに焦点を合わせたメタ言語的機能が、メッセージに対する指向をもつ詩的機能の発動を促したとは考えられそうだ。そもそ

³⁴ 多和田葉子『星に仄めかされて』講談社、2020 年、13 頁。

³⁵ 多和田葉子「韋駄天どこまでも」、多和田『献灯使』講談社、2014 年、179 頁。太字は多和田自身によるもの。

³⁶ 多和田「韋駄天どこまでも」、180 頁。

も、メタ言語によって語られる対象言語は、コードに限定されるのであろうか？

傑作論文との評価の高い「転換子と動詞範疇とロシア語動詞」(Shifters, Verbal Categories, and the Russian Verb, 1957)[以下「転換子と動詞範疇」と略す]でヤコブソンは、〈メッセージ〉とそれを下支えている〈コード〉について、「どちらもコミュニケーションの媒体であるが、二重のしかたで機能する」のであり、「同時に使用の対象ともなるし、関説(指示)の対象ともなり得る」と述べた。³⁷ ここで《手段＝目的モデル》を思い起こしてみれば、関説的機能を果たす〈メッセージ〉は指示対象を、すなわち三人称で指示されうる〈コンテクスト〉を〈指向〉し、³⁸ 発話の焦点が〈コード〉そのものに合わせられる時に——すなわち〈メッセージ〉が〈コード〉を〈指向〉する時に——メタ言語的機能が発動される、と定義されていたのだが、³⁹ 「転換子と動詞範疇」においては、コードが〈関説〉の対象となり得るとされ、コードに関説・言及するメッセージを「メタ言語」と呼んでいる。⁴⁰ ということは、論文「転換子と動詞範疇」で「メタ言語」と称せられるメッセージは、《手段＝目的モデル》の見地に立つならば、〈関説的機能〉と〈メタ言語的機能〉が共存しており、後者がドミナントなメッセージと理解すべきなのであろうか？

他方、メッセージへの関説・言及について、ヤコブソンは「発言中の発言であり、メッセージの中のメッセージであるが、同時にメッセージについてのメッセージでもある」と〈引用話法 reported speech〉のことを説明しているのだが、⁴¹ 『言語学大辞典 術語編』の「メタ言語」の項目には、「引用語(句)(直接話法)は、一般にメタ言語に属する」との記述がある。⁴² つまりは、引用された〈メッセージ〉が対象言語と見なされていることになる。実際、「“She loves you.”」は、三つの単語、四つの形態素からできている」というメタ言語的メッセージは、コードへの言及だけで成り立っているわけではなさそうだ。ヤコブソン自身、コードに〈関説〉するメッセージを「メタ言語」と定義しながらも、同じ論文の中で、こうしたコードの関説対象化が「引用、つまり発話の繰り返しと密接な関係がある」という、アメリカ構造言語学の代表者、レナード・ブルームフィールド(Leonard Bloomfield, 1887-1949)の指摘を引用しており、ここでは〈コード／メッセージ〉が峻別されていないように見える。⁴³ また論文「言語の二つの面と失語症の二つのタイプ」(Two Aspects of Language and Two Types of Aphasic Disturbances, 1956)では、対象言語とメタ言語の区別に触れつつ、「英語の語や文(English words and sentences)を英語の類義語、迂言法、パラフレーズによって解釈することがある」と述べられている

³⁷ Roman Jakobson, Shifters, Verbal Categories, and the Russian Verb, in *Selected writings II: Word and Language*, The Hague / Paris: Mouton, 1971, p. 130.

³⁸ Jakobson, *Linguistics and Poetics*, p. 22.

³⁹ Jakobson, *Linguistics and Poetics*, p. 25.

⁴⁰ Jakobson, Shifters, Verbal Categories, and the Russian Verb, p. 131.

⁴¹ Jakobson, Shifters, Verbal Categories, and the Russian Verb, p. 130.

⁴² 亀井・河野・千野『言語学大辞典第6巻:術語編』, 1337頁。

⁴³ Jakobson, Shifters, Verbal Categories, and the Russian Verb, p. 131.

のだが、⁴⁴「英語の語」はともかくも、「英語の文」はコードと無関係ではないにしても、メッセージであると考えるのが自然だろう。メッセージに〈関説〉するメッセージである〈引用話法〉、メッセージを〈指向〉する〈詩的機能〉、コードに〈関説〉する〈メタ言語的操作〉、コードを〈指向〉する〈メタ言語的機能〉の間には、ヤコブソンにとっても、厳密な区別を免れてしまうもの、何か共通するものがあるのではないのか？

「それ自体としてのメッセージへの指向、それ自体のためメッセージに焦点を合わせること——これが言語の詩的機能だ」という詩的機能の定義を読み返してみると、⁴⁵ ここでは「指向」や「焦点を合わせること」がいかなる主体に帰属しているかが明示されていない。指向性をもつのは誰か、いったい誰の焦点をメッセージに合わせるのか、それは送り手なのか、受け手なのか、はたまた人ではなく、言語あるいはメッセージの指向性なのか曖昧だ。

ただ、関説的機能については、「指示対象への指向、コンテキストへの方向付けが、数多くのメッセージの主たる役目である」と、〈メッセージ message〉が焦点合わせの主体であると読めなくもない言い方をしていたし、⁴⁶ メタ言語的機能についても「ことばは、コードに焦点が合わされる」というふうに、⁴⁷ 受動態である以上、厳密に焦点合わせの主体と見なせそうにないが、〈ことば speech〉と焦点合わせを結びつけてはいた。さらには、かつて『最新ロシア詩』において「表現への指向を伴う発話にほかならぬ詩は、いわば内在的な法則によって支配される」と、⁴⁸ 指向性の持ち主が発信者でも受信者でもなく、〈発話 высказывание〉であるとしていた。この「表現への指向を伴う発話にほかならぬ詩」という定義の場合、指向の出発点である発話と到達点の発話が等号で結ばれているとまで言い切れないにしろ、少なくともベクトルの出発点も到達点も同じメッセージの枠内にとどまっていることにはなりそうだ。こうしてあたかもメッセージが自分自身に焦点を当てているかのような再帰的な自己言及性は、「言語学と詩学」において詩を「自己に焦点を置くメッセージ(self-focused message)」と言い換えたり、⁴⁹ フランスで刊行された論集『詩学の諸問題』(Questions de poétique, 1973)のための跋文で「詩的機能は言語記号に対する内転的態度を前提とする」と⁵⁰ 「詩的機能の内転的性格」について言及しているあたりにも読みとれる。⁵¹ 〈コード〉に焦点を合わせるなり、関説するなりする〈メッセージ〉であるメタ言語にも、ある種の自己言及性、内転性があるから

⁴⁴ Roman Jakobson, Two Aspects of Language and Two Types of Aphasic Disturbances, in *Selected writings II: Word and Language*, The Hague / Paris: Mouton, 1971, p. 249.

⁴⁵ Jakobson, *Linguistics and Poetics*, p. 25.

⁴⁶ Jakobson, *Linguistics and Poetics*, p. 22.

⁴⁷ Jakobson, *Linguistics and Poetics*, p. 25.

⁴⁸ Якобсон. Новейшая русская поэзия. С. 10.

⁴⁹ Jakobson, *Linguistics and Poetics*, p. 42.

⁵⁰ Якобсон Р. О. Вопросы поэтики – Постскрипtum к одноименной книге // Работы по поэтике / Под ред. П. Д. Гаспарова. М.: Прогресс, 1987. С. 80.

⁵¹ Якобсон. Вопросы поэтики – Постскрипtum к одноименной книге. С. 81.

こそ、メタ言語的機能と詩的機能とが見分けがたいという事態が起こるのではないのか？

〈指向・焦点合わせ〉と〈関説・言及〉

論文「転換子と動詞範疇」においてメッセージに関説するメッセージは〈引用話法〉とされるのに対して、「言語学と詩学」ではメッセージに対する指向性を有するのは〈詩的機能〉というふうに、メッセージに関しては〈関説・言及〉と〈指向〉の差異は、かなり大きな違いとなって現れている。詩的機能は、関説的機能をいわば流用しているにもかかわらず、同じく関説的機能の流用ともいえそうなメタ言語機能のように、指向≡関説とはならないのだろうか？ この疑問に答えるにあたっては、「転換子と動詞範疇」の次の一節がヒントになってくれるだろう。あわせて原文も引用する。

Thus a message may refer to the code or to another message, and on the other hand the general meaning of a code unit may imply a reference (*renvoi*) to the code or the message.

たとえば、あるメッセージがコード、もしくはもうひとつ別のメッセージに言及することがありうる一方で、コードの構成要素の一般的意味がコードやメッセージへの言及(参照)を含意することもありうるだろう。⁵²

この引用文では——つまりメッセージによるメッセージへの言及・関説の場合に限っては——「もうひとつ別のメッセージ」というふうに、自己言及の可能性があらかじめ排除されているのである。それに引き換え、コードによる言及・関説については、コードの単位の「一般的意味」が、そのコードないしメッセージに直接言及するとは書かず、「言及(参照)を含意する」というきわめて回りくどい言い方をしている。⁵³ その理由を、山中は「コードが可能態としての体系をさし、メッセージがその具体的な行使をさすのであれば、前者に意味作用を認めるのは一見矛盾している」からだとして推測しているが、⁵⁴ 当該の言語単位が属するコードとその言語単位の〈一般的意味〉が言及しているコードは、同じコードか、あるいは当該単位を含む具体的で特定のメッセージのはずだ。そもそも厳密な意味でのコードに登録されている単位の意味が、特定のメッセージにおける文脈的・個別的意味であるはずはなく、それは一般的意味以外にはありえない。しかし、現実には、多義語の場合、〈語彙素〉の有する文脈的で個別的な意味が辞書(語彙コード)には列挙されているのだから、「転換子と動詞範疇」における〈コード〉と、《手段＝目的モデル》において〈メタ言語的機能〉が演繹的に関連づけられている〈コード〉という厳密な概念とが、完全に一致しているとは考えにくい。「転換

⁵² Jakobson, Shifters, Verbal Categories, and the Russian Verb, p. 130.

⁵³ Jakobson, Shifters, Verbal Categories, and the Russian Verb, p. 130.

⁵⁴ 山中桂『ヤコブソンの言語科学2 かたちと意味』勁草書房、1995年、158頁。

子と動詞範疇」において言及されている〈一般的意味〉も、言及されていない〈個別的意味〉も、文脈のなかで機能している特殊例から帰納的に抽象された意味ではないのか？ もしそうであるなら、その意味が登録されている語彙コードも厳密な〈コード／ラング〉というよりも、ソシュールの直弟子で『一般言語学講義』(Cours de linguistique Générale, 1916)の編纂者の一人として知られるアルベール・セシュエ(Charles-Albert Sechehaye, 1870-1946)の提起した〈組織されたパロール〉に似た性格を帯びているように思われる。⁵⁵ ヤコブソンにしても、フォルマリズム時代に〈方言〉に注目していたし、後には〈下位コード〉という概念を打ち出しているのである。そうしたコード観からすると、「言語学と詩学」や「転換子と動詞範疇」における〈コード／メッセージ〉の二項対立は、現実に即さぬ理論的虚構にさえ思えてくる。

実際、「転換子と動詞範疇」において取り上げた人称代名詞や指示代名詞のような〈転換子 shifters〉は、その転換子を含む個別的特定のメッセージに言及しない限り、関說的機能を果たせない。コードによる〈言及〉に見出されるのは、厳密な意味での〈自己言及〉ではないにしても、「自己言及的な」ベクトルを有する関説のしかただ。つまり、詩的機能は、関說的機能をいわば流用しているにもかかわらず、同じく関說的機能の流用ともいえそうなメタ言語機能のようには、〈指向〉イコール〈関説〉とならないのである。それは不可解かもしれないが、「言語学と詩学」の〈詩的機能〉の場合は、〈指向〉の主体がメッセージであり、その焦点が当該のメッセージそれ自体に合わせられる自己言及的な指向なのに対して、「転換子と動詞範疇」の〈引用話法〉の説明では、ヤコブソンによってあらかじめ自己言及性が排除されているからなのである。より具体的な〈言及・関説〉という操作と、より一般的な操作である〈指向・焦点合わせ〉との間に差異があるからだとは考えにくい。少なくとも詩的機能の発動する場が詩的メッセージであること、その結果として詩的メッセージには再帰的指向が存在するがゆえに、同じく自己言及的なメタ言語機能との区別が時によって曖昧になるのではないか？ 一方、メッセージが再帰的に自分自身(メッセージ)に〈言及・関説〉することは原理的に不可能なのではなく、ヤコブソンがメッセージによるメッセージへの関説の可能性の中から自己言及を排除してしまったからに過ぎず、そのため「転換子と動詞範疇」においてメッセージに関説するメッセージ——ヤコブソンの表記法を借りれば M/M——である〈引用話法 reported speech〉が、「言語学と詩学」においてコードに焦点が合わせられている〈ことば speech〉——仮にこれを M→C と表記しよう——が果たすと規定されている〈メタ言語機能〉と類似性を示すにもかかわらず、メッセージへの指向性(M→M)と定義された詩的機能とはひどくかけ離れているような印象を与えるのだろう。

⁵⁵ 〈組織されたパロール〉については、山口『パロールの復権』、50-55 頁を参照されたい。

〈転換子〉のもたらす自己言及性

とはいえ、メッセージが自分自身に〈焦点合わせ〉ができたとしても、直接〈言及〉するという事態は考えにくい。考えにくい、まったく不可能なわけではない。そうした希有の例が高松次郎(1936-1998)の版画作品、メタ言語的なタイトルを有する《日本語の文字》(1970)と《英語の単語》(1970)である。⁵⁶ 前者には「この七つの文字」という句の、後者には“THESE THREE WORDS”という句のタイプセットが白紙の上に印刷されているにすぎない。

この二作品は、造形芸術の枠内において自己引用が——メッセージそれ自体がメタ言語的メッセージであるという再帰的指向が——美的な機能を発動させる可能性を示唆しているように見える。おのおののテキストは、英語と日本語の〈コード〉に關説する〈メッセージ〉であると同時に、〈メッセージ〉それ自体へと内転して言及する〈メッセージ〉でもある。

こうしたほとんど完全な自己言及を可能にしているのは、作品のテキストに含まれる「この」や“THESE”といった指示語——ヤコブソンが「メッセージに依存するコード」として論じた〈転換子〉の一種であり、一般的には〈直示 deixis〉という言語学用語で知られている指示語である。「この」と“THESE”という指示語が具体的なメッセージの中で何を指示するかは、メッセージの発信された状況に依存しているがゆえに——その一般的意味を規定するには必ず当該のメッセージに關説しなければならぬがゆえに、そのメッセージを含む芸術的オブジェとしての作品を再帰的・自己言及的に指し示す。その結果、高松作品は、言語「テキスト」のみならず、そのテキスト(メッセージ)がプリントされている紙やプリントするインクの色やかすれのような「テクスチャ」にまで観者の注目を集め、版画という複製メディアの作品体験に受容者との個別的な関係性を持ち込む。あくまで希有の例外ではあるが、《日本語の文字》と《英語の単語》は、ヤコブソンの言語学のもつ芸術論的可能性の一端を示すと共に、コードとメッセージの峻別に基つき詩的機能とメタ言語的機能を厳密に区別する《手段=目的モデル》に対する疑念を抱かせもする。

(おおひら よういち)

⁵⁶ 中尾優衣、牧口千夏編『印刷／版画／グラフィックデザインの断層 1957-1979』国立工芸館・京都国立近代美術館、2023 年、29 頁。これら二作品は、《独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索システム》で見ることができ。[<https://search.artmuseums.go.jp/records.php?sakuhin=8326>; <https://search.artmuseums.go.jp/records.php?sakuhin=8327>] 2025 年 7 月 7 日閲覧。

A Reconsideration of Poetic / Metalinguistic Functions in Jakobson's Means-Ends Model

Yoichi OHIRA

In his well-known article “Linguistics and Poetics,” Roman Jakobson proposed the Means-Ends model, which is now recognized as the most authoritative model of language functions. In this model, Jakobson identified three factors in Carl Bühler’s classical Organon model: the sender (the first person), receiver (the second person), and something or someone as the topic of the utterance (the third person)—and the three functions associated with each factor, namely, the expressive, conative, and representation functions. Thus, Jakobson’s innovation lies in supplementing the Organon model with three additional factors and three corresponding functions, namely, the three factors contact, code, and message, and the corresponding phatic, metalinguistic, and poetic functions.

In Jakobson’s Means-Ends model understanding of language, among the six functions are the poetic function, defined as a “focus on the message for its own sake,” and the metalinguistic function, defined as “focus on the code,” which are frequently discussed with the referential function, which is dominant in most messages.

Jakobson sharply distinguishes between these two functions. However, in reality, the distinction between the two functions is not always easy to make; this is particularly true in the case of poetic works including wordplay. For instance, in Ezra Pound’s lines “To study with the white wings of time passing / is not that our delight / to have friends come from far countries / is not that pleasure,” the phrase “white wings” creates a montage of the kanji characters for “white” 白 and “wing” 羽, suggesting the kanji character for “study” 習, thus achieving a poetic effect through a metalinguistic operation. The difficulty in distinguishing between the poetic/metalinguistic functions lies in the fact that the distinctive features of poetic and metalinguistic functions forms a binary opposition between code and message. However, code and message are language in the broad sense, and the opposition between them is neutralized, becoming non-differential. There is a commonality—of reflexivity or self-reference—between the metalinguistic and poetic functions, in that words as message refer to words as code or message.

In his article “Shifters, Verbal Categories, and the Russian Verb,” Jakobson also discusses the correlations between message and code, stating that “both the message and the

underlying code are vehicles of linguistic communication, but both of them function in a duplex manner; they may at once be utilized and referred to.” In this paper, messages referring to the code are defined as “metalanguage,” which is not far removed from the definition of “metalinguistic function” as “the set toward the code” in “Linguistics and Poetics.” Nevertheless, when discussing messages that refer to messages, Jakobson categorically states that they are “reported speech,” as if self-referentiality were impossible; he discusses them as if they were completely unrelated to poetic function. However, this is because he has excluded the possibility that a message can refer to itself by stating in “Shifters, Verbal Categories, and the Russian Verb” that “a message may refer to the code or to another message.” While a message may focus on itself, it seems almost impossible for a message to refer to itself. However, the texts printed in Takamatsu Jiro’s offset lithographs “Japanese Characters” and “English Words,” 「この七つの文字」(these seven characters) and “THESE THREE WORDS,” are self-referential messages that possess poetic and metalinguistic functions.